そこにいる子が子どもであるということ③
自分の中の「子ども」を手探りする

浜口順子
（大学教員）

散歩する

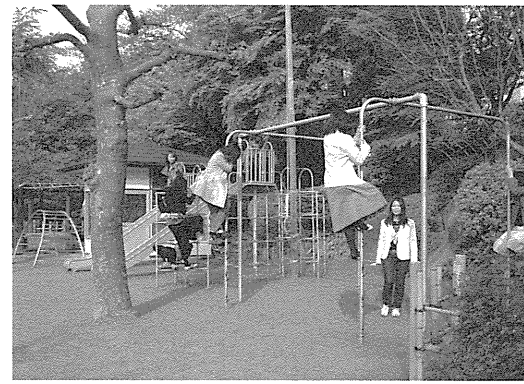
「今日はいい天気なので、外を散歩しましょう」

梅雨入り前のすがすがしい青空の日。歩くと少し汗ばむほどだが、風がかえって爽やかに感じる。今日しかない。私の勤めるお茶の水女子大学のキャンパスは、狭いが、樹木の種類は多い。附属ナーサリーや今年開園した認定こども園の散歩コースでもあるので、最近は小さい子どもたちと学生や教員がすれ違うことも珍しくなくなった。そこを、今日は子どもの気持ちになって歩いてみようということにした。学部一年生向けの保育学入門的な授業。週末金曜の午後三時からのコマということもあり、慣れない大学生活で疲れているだろう心身を癒やそうという狙いもなきにしもあらずだ。体を動かす活動を取り入れ、座っていても「右脳」を活発にしてもらうような授業を心掛けている。受験勉強でカチカチになっている（に違いない）一年生の頭と心をほぐしたい。受講者は三十名余り。ほとんどが十八歳。十八年

浜口順子（はまぐちじゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

間に培った「子ども観」も、ほぐしたいものの一つだ。

荷物は教室に置いて手ぶらで歩いたが、携帯電話を皆ほとんど持っていて、要所要所で写真を撮っている。アジサイ、タイサンボクの花がきれいだ。ユリノキの葉の形が面白いと騒ぎになる。こういうことでもないと、キャンパスの樹木などほとんど見ないで卒業してしまうものかもしれない。自分の子ども時代や故郷を思い出して「懐かしい」と感想を書いた学生も多かった。親のことを思い出した学生もいた。「私はアジサイが大好きなので、お茶大に色とりどりのアジサイがたくさん生えているのを見られて、とてもうれしかったです。母もアジサイが好きなので、今日撮った写真を送ってあげようと思います」。



幼稚園で遊ぶ

この授業では必ず一回、附属幼稚園を訪問し、子どものいない幼稚園空間を学生に感じてもらう。今年創設一四〇周年の特色ある幼稚園（今の場所に移転して八十年以上たつ）であることを学生は知識としては知っており、外から見ると古めかしく堅牢で近寄りがたい雰囲気の漂う建物でもあるので、中に入ってみて、まず親しみを感じてほしいというのが第一の目的だ。「森のような場所に木製の遊具があり、絵本の中の世界にいるようでした」「小さい

椅子や絵本、子どもたちが描いた絵などを見ていると、昔を思い出してとてもあたたかい気持ちになりました」。

こうした懐かしさや「子どもの小ささ」を感じるほかに、自分自身が子どもに返ったような印象を受けている人が多いのも面白い。今年の授業では、園庭の遊具や、遊戯室の大型積み木やカプラ（薄くて細長い、すべて同じ形の木片から成るブロック遊具）で遊ぶ時間を設けたが、その感想で次のようなものもあった。「何か作りたくなったり、触ってみたくなる楽しいものがたくさんあって、先生も『自由に遊んでいいよ』と言ってくださったので本当にわくわくしました。自由にやりたいようにさせてもらえる、というのはこんなに楽しいものなのかと驚きました」「小さい頃、おままごとをやらなかった私にとっては、今すぐにでもおままごとをしたい！という子ども心に返ることができてうれしかった」「懐かしい絵本がたくさんあり、自分が今まで多くの絵本を読んでいたことに驚いた」「幼稚園の中にいるだけで落ち着いたので、幼稚園は他の建物とは違う特別な場所のように感じました」。過去に持っていた童心に「返る」というよりも、今新たに自分の中にある「子ども」を幼稚園という場所で感じているという印象がある。

赤ちゃんとお母さんに出会う

一年生の入門授業や二年生の保育学の授業では、〇歳の赤ちゃんを育てる大学院生や、卒業生の「お母さん」に授業協力をお願いして、出産や分娩、育児の経験談や、仕事や研究との両立の話などをしてもらう。そして、赤ちゃんを抱っこさせてもらう。赤ちゃんが眠ってしまったり、学生が多過ぎたりすると無理なのだが、なるべく近くで触れられるようにしてもらう。写真を見てもわかるように、赤ちゃんのそばで、学生たちの表情は全く変わる。輝く、と言ってもいい。また、話をする側の母親も、誇り高く、あふれるように学生に話をしてくれる。授業の効果云々というよりも何よりも、その雰囲気の素晴らしさに、私自身ほれぼれしてしまう。

数年前、卒業して助産師になった女性がいる。同窓会で再会したときに、実はこの授業で赤ちゃんとお母さんに会ったことがきっかけだったと話してくれた。